

緊急事態宣言下における 別居家族とのコミュニケーション機会の変化②

— 別居家族とのオフライン・オンラインコミュニケーションは？ —

主任研究員 北村 安樹子

本稿では当研究所が5月中旬に実施した「第2回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」*¹から、緊急事態宣言が全国に発令された4月中旬以降における別居家族とのコミュニケーション機会の変化に注目する。

<別居家族との対面接触機会とオンラインコミュニケーション>

第2回調査では4月中旬頃と比べた別居家族とのコミュニケーション機会として、「直接会って、一緒に過ごす時間」「電話やメールでコミュニケーションすること（音声や文字のみ）」「写真や動画を用いてコミュニケーションすること」の3つの側面に関する変化の状況をたずねている。前稿でみたように、別居家族と「直接会って、一緒に過ごす時間」については減ったと答えた人が回答者全体の3割弱を占めるなか、後者2つのオンラインコミュニケーション*²については減ったと答えた人が1割未満と限定的な範囲にとどまった一方で、増えたと答えた人も約2割を占めた。

これらの対面接触機会と、オンラインコミュニケーションには何らかの関連性がみられる可能性がある。以下では「直接会って、一緒に過ごす時間」の変化と、これらのオンラインコミュニケーションの変化の関連性について考察する。

<「直接会って、一緒に過ごす時間」が減った人の4割弱で「電話やメール」、

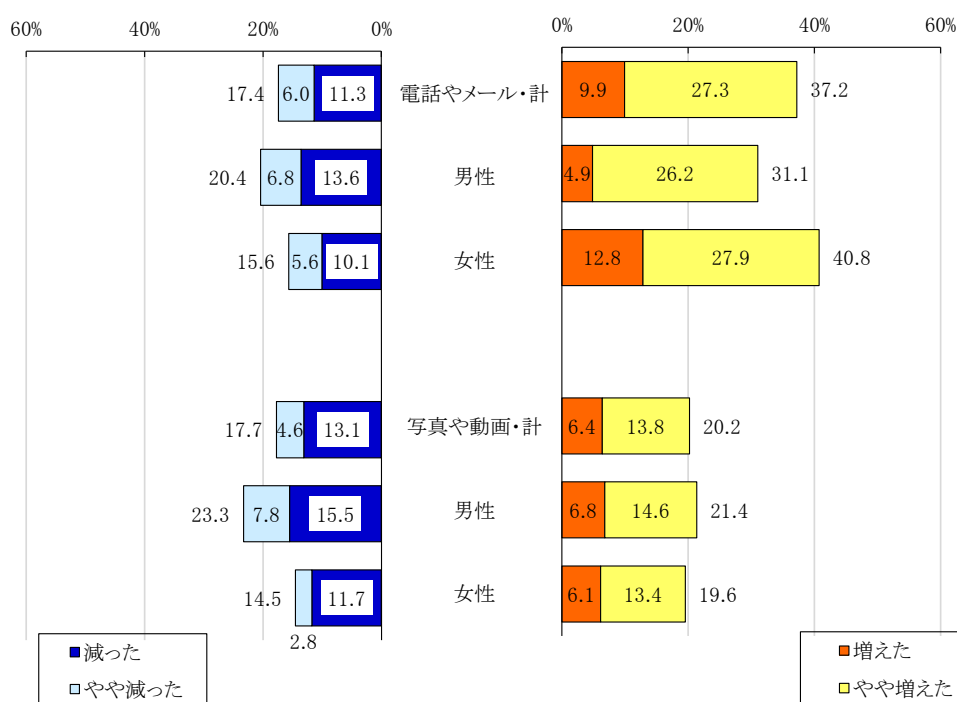
約2割で「写真や動画」を用いたコミュニケーションが増加>

はじめに、「直接会って、一緒に過ごす時間」が減ったと答えた人に関し、「電話やメール」「写真や動画」を用いたオンラインコミュニケーションの変化に関する回答をみたところ、いずれかのオンラインコミュニケーションが増えた人の割合は39.7%であった（図表省略）。項目別にみると、「電話やメール」については37.2%、「写真や動画」については20.2%が増えたと答えている（図表1）。これらの人は、別居家族との対面接触機会の減少を、オンラインコミュニケーションで補った可能性がある。

一方、4月中旬頃に比べて、別居家族と「直接会って、一緒に過ごす時間」が減ったと答えた人の2割弱は、オンラインコミュニケーションについても減ったと答えていた（「電話やメール」17.4%、「写真や動画」17.7%）。このような人はオンラインコ

コミュニケーションが増えた人に比べれば少ないが、「写真や動画」に関する男性の回答では、減ったと答えた人が増えたと答えた人を上回った。緊急事態宣言以前のライフスタイルやオンラインコミュニケーションの目的等にもよるが、男性には直接会って一緒に過ごす時間の減少とともに、写真や動画を用いたオンラインコミュニケーションも減った人が女性に比べて多くなっている。

図表1 4月中旬頃に比べ、別居家族と「直接会って、一緒に過ごす時間」が減ったと答えた人におけるオンラインコミュニケーションの変化(性別)



注：設問文は『「緊急事態宣言」の対象地域が全国に拡大された4月中旬頃に比べて、あなたの生活には次のような変化がありましたか。もともとそれをおこなっていない方は「変化なし」を選んでください。』。「電話やメール」は「電話やメールでコミュニケーションすること（音声や文字のみ）」、「写真や動画」は「写真や動画を用いてコミュニケーションすること」

資料：第一生命経済研究所「第2回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」2020年5月実施。調査対象者は全国の20～69歳男女1,000人。調査方法はインターネット調査。

<「直接会って、一緒に過ごす時間」が増えた人では、半数弱で「電話やメール」、

約4割で「写真や動画」を用いたコミュニケーションが増加>

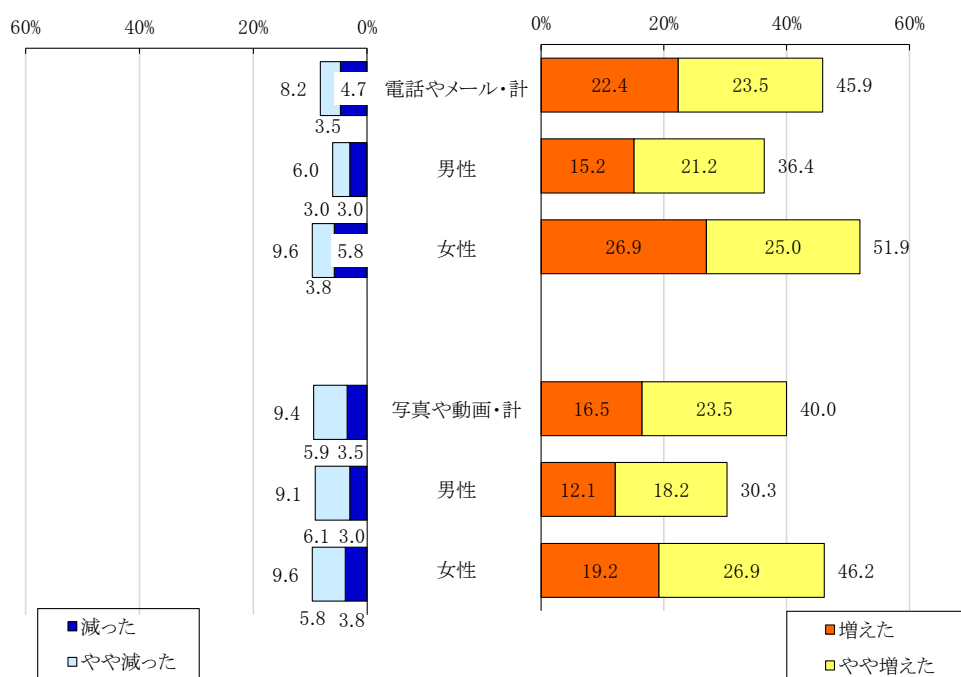
一方、上述した「直接会って、一緒に過ごす時間」が減った人に比べ該当者は少ないものの、4月中旬頃に比べこのような時間が増えたと答えた人においても、オンラインコミュニケーションが増えたと答えた人が減ったと答えた人を大幅に上回った(図表2)。オンラインコミュニケーションが増えたと答えた人は、「電話やメール」では45.9%、「写真や動画」では40.0%を占め、上述した「直接会って、一緒に過ごす

時間」が減ったと答えた人がこれらを用いたオンラインコミュニケーションを行った割合（同37.2%、20.2%）をいずれも上回っている。

また、「直接会って、一緒に過ごす時間」が増えた人では、減った人に比べオンラインコミュニケーションが減ったと答えた人の割合が低く、性別やオンラインコミュニケーションの方法によらず1割に満たない。これらの人では図表1でみた「直接会って、一緒に過ごす時間」が減った人に比べオンラインコミュニケーションが増えた人の割合は高く、減った人の割合は低い。また、これらの傾向は、男性に比べ女性でより顕著にみられる。

なお、「直接会って、一緒に過ごす時間」に関し回答者全体の6割強を占めた「変化なし」と答えた人では、「電話やメール」「写真や動画」のいずれのオンラインコミュニケーションに関しても「変化なし」と答えた人が9割を超えた。別居家族との対面接触機会に変化がなかった人の大半は、オンラインコミュニケーションにも変化がなかったと考えられる。

図表2 4月中旬頃に比べて、別居家族と「直接会って、一緒に過ごす時間」が増えたと答えた人におけるオンラインコミュニケーションの変化(性別)



注・資料は図表1に同じ

＜別居家族との対面接触が減った人で増えたオンラインコミュニケーションは、

電話・メールが中心＞

別稿^{*3}では、5月はじめのゴールデンウィークにおける消費機会の喪失についてたずねた設問から回答者の帰省予定やその中止状況を分析し、ゴールデンウィーク中に

家族や友人知人と自宅でインターネットを使ってオンラインで交流した人は男性より女性に多く、20代男女で顕著にみられたことを指摘した。

本稿の分析でも、緊急事態宣言以降の対面接触の減少をオンラインコミュニケーションで補っている可能性がある人は男性に比べ女性で多くみられた。また、このような場合のオンラインコミュニケーションでは、「写真や動画」に比べ「電話やメール」を用いたコミュニケーションが増えているケースの方が多かった。

一方、このような人に比べ該当者は大幅に少ないが、緊急事態宣言以降も別居家族と「直接会って一緒に過ごす時間」が増えたと答えた人においても、それらが減ったと答えた人以上に、別居家族とのオンラインコミュニケーションが増えたと答えた人の割合は高かった。これらの人では緊急事態宣言の対象地域が全国に拡大された4月中旬以降も、オフライン・オンラインの両面にわたって別居家族とのコミュニケーション機会を増やした可能性がある。サンプル数は限られるが、このような人のなかには、別居家族と「直接会って、一緒に過ごす時間」とともに、「電話やメール」に近い水準で「写真や動画」を用いたコミュニケーションも増えたと答えた若い女性が含まれていた（図表省略）。スマートフォンやSNSなど本人や家族が利用する機器やコミュニケーションの手段、目的等にもよると思われるが、若い世代では親や兄弟姉妹などの別居家族も、「写真や動画」を用いたコミュニケーションやその操作に慣れていること等が関連しているのではないだろうか。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)

【注釈】

*1 第1回・第2回調査の概要については、当研究所発行の以下のリリースを参照されたい。

<第1回調査>

「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（前編）」

http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_01.pdf

「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（後編）」

http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_02.pdf

<第2回調査>

「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（つながり編）」

http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_05.pdf

*2 本稿では、「写真や動画を用いたコミュニケーション」をオンラインコミュニケーションとして分析した。

*3 北村安樹子「ウィズコロナ時代における「帰省」の行方」

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/wt2006f.pdf>

*弊社ホームページの「新型コロナウイルス意識調査特集ページ」にてこれまでに実施した調査データや関連レポートを公開しています。

http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v_year